

アウトドアブームの環境社会学的考察

——自然認識の構造を手がかりとして——

井戸 聡

はじめに：「オートキャンプ客」と「釣り客」

——集団に対する認識の相異 ——

あるオートキャンプ場を管理している地区の人々に話をうかがっているときに感じた疑問がある。そのオートキャンプ場は湖に面した松原に造成され、夏のシーズンには数多くのオートキャンパーがRV(recreational vehicle)にキャンプ用品を満載して家族連れでやってくる。キャンプ場経営に関わる地区の中心メンバーや周辺地域に長年暮らしてきた人々、隣接する漁港を拠点として生業を営む漁協関係者などに聞いてみると、オートキャンプにやってくる人々については概して肯定的に語られる。いわく「昔のキャンプの客にくらべ、今頃はマナーも良くなった」「キャンプのお客さんとのトラブルはほとんどない」「この辺のひとで（キャンプ場やキャンプ客に対して）文句いう人はほとんどおらん」など。¹⁾

この地区にはオートキャンプに訪れる人々だけでなく、釣り客も頻繁に訪れる。釣り客の大半はルアーフィッシングという釣り方で、ブラックバスに狙いを定めて釣りにやってくる若者たちであるという。オートキャンプ客について語られる肯定的な口調に比べて、こうした釣り客に対しては否定的に言及されることが往々にしてあり、いくぶん語気が荒くなるような場面も見受けられる。「釣りにくる人らは悪さしよる」「この辺の人らは釣り客にあんまりいい印象をもっとらん」という具合である。²⁾地元の人々にとって釣り客はマナーが悪いと認識され、良い印象はもたれていないようである。

こうしたことから、「釣りをする人々」＝「規範に欠ける集団」・「好ましからざる集団」という認識のされ方がなされている、というような理解の図式をたてたところである。しかし、オートキャンプ場内を見てまわってみると、持ち込まれているキャンプの道具のなかに、釣り具が並べられている場面が少なからず見受けられるのである。湖畔にはオートキャンプに訪れている客とおぼしき人々がいたところで釣りに興じている。オートキャンプ客であっても釣り客と同じように釣りを

¹⁾聞き取りによる（一九九九年八月、滋賀県）

²⁾聞き取りによる（同上）

しているのである。オートキャンプ客と釣り客は同じ釣りという行為をしていながらも、それぞれに違ったイメージを持たれている。こうしたイメージの相異はどのようなところからくるものなのだろうか。

この論考では、こうしたフィールドで得られた素朴な疑問を出発点としている。具体的にはアウトドアと一般に呼ばれている人々の行為についての一考察である。アウトドアムーブメントは現代に特有な現象であり、きわめて社会的なテーマといえるが、こうした領域を対象とする研究の蓄積は非常に少ない。日本での社会的な研究の状況に限っていえば、アウトドアを環境行動の一形態としてとらえる環境社会学や、遊びや消費としてとらえる文化社会学において研究対象とされてきた。アウトドアは自然を重要な要件としているので、特に環境社会学の文脈で論じられてもよさそうなのである。しかし公害や環境汚染などの緊要な社会問題の解消が要請されていた社会状況のなかで成立してきた初期の環境社会学の領域では、重度の社会問題が対象とされることが多かった。また、農村社会学や民俗学の影響を受けていることからひとつの地域社会をひとつの研究対象としてとらえる傾向があり、フィールドとして都市的な地域よりも農山漁村のような非都市的な地域社会が選ばれることが多い。アウトドアは世間を騒然とさせるような緊要な社会問題ではない。また、都市的な人々による都市的な行為なのだが、非都市的な場で営まれることが多く、フィールドを定めにくい。このような状況から研究対象として論じられる機会が少なかったと推察される。

種々の環境問題は非都市的な場で起きているものであっても、都市的な要素と深い関わりをもってしている。自然環境の保護などという場合、守られるべき自然をもっている地域の問題としてとらえられ勝ちであるが、保護を呼びかける人々の都市的な論理性が問題を引き起こしているというケースは多い。そういった意味で、都市的なものと非都市的なものとを切り結ぶことで成立するアウトドアをみていくことは、環境問題を考えるうえで非常に示唆的であり、環境の時代といわれる今日においてきわめて重要な論点を内包している。

この論考では人々の普遍的で基本的な認識の仕方を手がかりとしてアウトドアが説明される。これまでは人々の認識と自然環境問題の関連は、哲学や倫理学などの分野で環境思想として取りあげられることはあったが、社会的な文脈で、特にケーススタディの領域で論じられることは少なかった。ここで提示されている認識論に基づく読み解きの枠組みは、アウトドアだけでなく様々な現象をみるうえで有効であると考えられる。というのも、自然や環境に絡む社会問題の多くは、ここで論じられている事例とパラレルな構造をもっていると考えられるからである。アウトドアは現代社会の特異な現象であるが、これを考察することは単なるサブカルチャー研究の域にとどまるものではない。近代日本社会の歪みとして析出してきた公害や環境問題と同様の根をもつのがアウトドアである。これをみることはとりもなおさず、社会の近代性や都市性をもその射程に入れていることになるのである。

1. アウトドアブーム ——「自然」志向とその極限 ——

今年八月、神奈川県の大井川の中州でキャンプ中の会社の同僚家族一八人が、突然の増水に逃げ遅れて流され命を落とすという水難事故がおきた。この事故は時のニュースとなり、各マスコミがこぞって報道合戦を展開し、時に特集が組まれるという総ジャーナリズム状況（新井、一九八九）を引き起こした。こうした報道のなかで必ずといっていいほど取り沙汰されていたのがアウトドアムーブメントについての現況である。この類の事故が発生する前提条件として、全国各地でアウトドアレジャー客が増え続けている社会現象があると報じている。³⁾

こうした状況はアウトドアブームと呼ばれている。事故はこうしたアウトドアレジャー高揚のひとつの帰結としてとらえられた。例えば、あるテレビ番組では事故について次のような説明がなされた。近年オートキャンプを楽しむ人々の数は増え続けているが、キャンプ場などの施設やキャンプに適した条件の良い場所というのは、そうした需要に対して飽和状態にある。好適地を確保できずにあふれた人々が不適な危険度の高い地帯にやむなく場所を求める、その結果が今回の事故であるという。アウトドア系雑誌の代表的存在である『BE-PAL』は「キャンプ場はどこもかしこも満杯。そんな時、誰もいない中州を見つければ、僕だってその中州に上陸したくなると思う」（一九九九年十月号、七三頁）と、同様の言及をしている。事故をブームの極限值であるとするこの種の説明は必ずしも事態を十全に説明しているのとはいえないだろう。キャンプについての基本的知識の不行き届きや、河川管理の妥当性など事故の要因はほかにも考えられる。しかし、ここで注目すべきはこうした認識にいたる前提として、オートキャンパーの急増という社会的現象が常識的になっているという事実である。アウトドアムーブメントは社会的事実としてとらえられている。こうした認識は次のような記述に端的に表れている。「近年、観光・余暇活動として、オートキャンプの人气が高まってきている。オートキャンプは、キャンプ本来の自然とのふれあいを、自動車と利用することにより、より手軽に味わえるものであり、急速に普及してきている。」⁴⁾

オートキャンプブームという流行現象を支えているファクターとして考えられるものには様々なものが考えられる。例えば、RV(Recreational Vehicle)という商品の考案とマスコミの宣伝・広告によるイメージ戦略。家族旅行の増加を促すことになった核家族化現象、そのさらに先鋭的な表出である家族崩壊現象、そして社会的枠組みの最小単位である家族の崩壊に対する危機意識。公害問題以降、醸成されてきたエコロジー感覚と自然志向の意識。ハードの面でいえば、オートキャンプ場の整備、道路交通網の整備、キャンピング用品の普及など。こうした個々の因子について詳細に思考をめぐらす

³⁾例えば、「事故の背景にオートキャンプの普及があることを重く受け止めたい」（朝日新聞朝刊、一九九九年九月一四日付、「論壇・大井川事故の悲劇を教訓に」より）

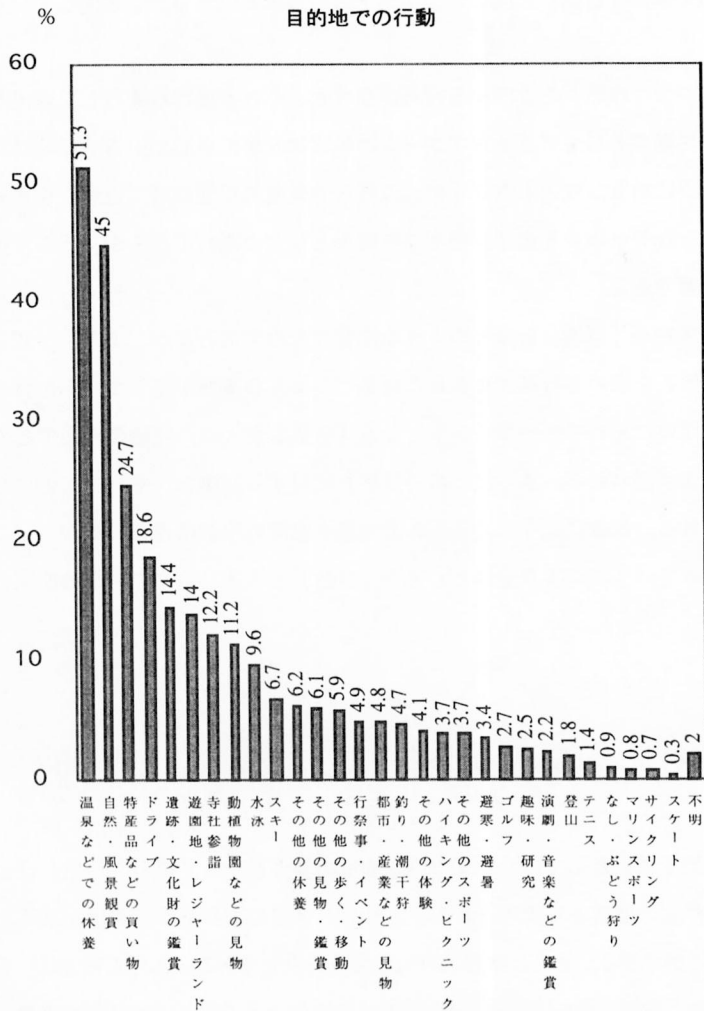
⁴⁾『平成10年版観光白書』総理府編、大蔵省印刷局、一九九八年、一六二頁

ことは有意なことである。しかしここで採りあげようとするのは、仔細な状況的要因についてではない。ここではアウトドアやキャンプの最大の要件である「自然」を解説のポイントにおくことにする。

なに故に「自然」なのか。例えば先ほどの引用を思い返していただきたい。「オートキャンプは、キャンプ本来の自然とのふれあいを、自動車を利用することにより、より手軽に味わえるもの」(下線筆者)。ここでオートキャンプは自然との接触を持つためのひとつの機会として位置づけられている。つまり、自然と触れあうことこそこうした行為の本懐であると言及がなされているのである。このことはオートキャンプブーム現象を誘導する動機を探るうえで重要なポイントとなる。次のような場面を想定してみると分かりやすいだろう。人工的な建造物が林立する都心部のアスファルトで舗装された空間にRVで乗りつけ、タープを張りテントを設営し、そこにキャンプする。この仮想シーンを思い描いてみると、そこにはキャンプで味わう楽しみの大部分が削がれてしまっているという感覚を覚える人は少なくないであろう。キャンプでもたらされる愉悦の大部分が「自然」の存在を前提として初めて成立しえるものだからであり、この仮想シーンにはそうした「自然」的な要素が欠落しているからである。魚を捕まえたり釣りをしたり、泳いだり、砂遊びをしたり、日光浴を楽しんだりするための「水辺」が必要であり、虫取りや散策、森林浴などを楽しんだりするための「緑」を必要とするのである。また、人工的な気配を希薄にさせる暗闇や静寂、または虫音やせせらぎ、さざ波、風などの音や肌感覚がキャンプというレジャー空間の欠くべからざる「自然」的な要素としてあることに異論を唱えるものは少ないであろう。これらを内蔵した総体としての景観が「自然」的風景として背景に控えていることが要請されているのである。これらの要件を満たす空間は例えば「海へ、山へ、川へ」といったような言説として具体的かつ象徴的に、そして集約的に表現されるのである。

このように考えてくる過程で分かることだが、こうした「自然」を包み込む空間を求めるのは、なにもオートキャンプに限ったことではなく多くのレジャー・余暇活動に見られる傾向である。釣りやダイビング、登山、スキー・スノーボードなどはその一例であるし、自然景観の観賞を目的とする観光旅行では見応えのある「自然」が必須の要件となる。様々なかたちをとりながら、こうしたレジャー・余暇活動が行われるが、これらに通底しているのは「自然」を要求する人々のメンタリティである。これらは「自然」を求めるというエートスによって誘導された「自然」要求型の行為群といえよう。アウトドアブームとして認知されている流行現象は、こうした「自然」要求型の行為の一形態と考えてよい。これらの行為は基本的に「自然」との接触のチャンス(可能性)でしかないが、アウトドア空間や資源のキャパシティが飽和状態にある状況を考慮すれば、いかに多くの人々が「自然」を志向してこうしたチャンスに賭けているかが分かる。

こうした「自然」志向の態度はツーリズムに関する次のような調査のなかにも見て取ることができる。全国旅行動態調査による、観光旅行における目的地での行動に関する調査結果では「自然・風景鑑賞」の高まりが指摘されている。⁵⁾



『観光レクリエーションの実態——第八回全国旅行動態調査報告書——』より作成

その他の項目についても「自然」を前提として成立するものが散見される（例えば「温泉などでの休養」「水泳」「スキー」「釣り・潮干狩り」「避暑・避暑」「ゴルフ」「登山」「マリンスポーツ」などの項目）。こうしたツーリズムにおける「自然」との接触のチャンスを要求する態度は、例えばグリーンツーリズムというツーリズムの形式に端的に現れる。オートキャンプをはじめとするこれら一連の「自然」要求型の行為は、「自然」とのコンタクトを図るツールとしてそれぞれの機会を利用している合目的的行為としてみることができる。「自然」志向の態度の高揚が、具体的にアウトドアブームという流行現象として、そしてまたアウトドア空間の飽和、アウトドア資源の枯渇という極限現象として表出している。これを裏返していえば、水難事故に象徴されるアウトドアブームの極

⁹前掲書、六八～六九頁

限状況は、肥大化してきた「自然」志向というエトスの極みという事態を表明しているのではないかと考えられる。

様々な形態をとりつつ「自然」を志向する行為がなされ、それが流行現象として表出している。そうした動向のひとつの極点としてアウトドアブームの極限状況が出現している。なぜ「自然」なのかについての理由はここにある。先述したように、これらの現象の根底には「自然」を求める人々の態度がある。それは様々なチャネルを通じ、様々な形態をとりつつ現れてくるが、そこに通底するのは「自然」を求める姿勢である。

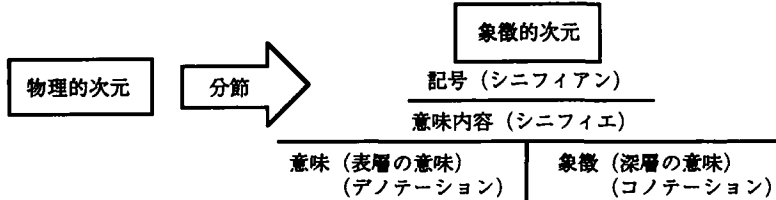
このように人々が求める「自然」とはどのような性質のものであろうか、また、なぜ「自然」は求められるのか、「自然」を求める行為がなされた結果どのような事態が生じているのだろうか。以下の章ではこのような問いにおいてキーポイントとなる「自然」が人々の認識のうえでどのような性質の存在であるのかがまず問われる。さらにこの「自然」に対する認識と、それをもとになされる人々の行為の連関が問われる。最後にこうしてえられた知見を実際の事例に還元しながら、こうした行為の意味するところをみていく。つまり全体として、「自然」と人間社会についての関係の考察がなされることになる。

2. 「自然」の定位 —— 「自然」というイメージ ——

オートキャンプの例を思いだしていただきたい。愉悦の要件となっている「自然」は山、川、海などに代表される「自然」の要素から構成される。これらの構成要素がもつ意味は大きく次の二つの次元に分けて考えることができる。それは物理的次元と象徴的次元である。ふだん我々は、魚、水、砂、植物、昆虫、明暗、音、空気、風、山、川、海、森林などといった存在を自明視して認識しているが、物理的次元で考えればこれらは物質と運動にすべてを還元できる物理存在にすぎないということもできる。こうした物理存在に対して意味を与え、山、川、海などと呼んで、そこに「自然」を感じとっている。これが象徴的次元である。この次元は次のような四つの領域に分けて考えられる。1：物理存在に境界を設定して領域化する（分節）。2：その分節された領域を表す意味を与える（意味）。3：意味をもつ領域を水、湯、湯気、氷、H₂Oなどと名づけて呼ぶ（記号）。4：ある特定の条件を満たすとき、特定の意味を誘導する（象徴）。例えば山は峻険、緑、清浄、安定、尊厳などを連想させ、そこに「自然」を感じとらせる。

周囲の存在を質量と運動にすべてを還元して、物理的次元だけでとらえて認識することは実際には希である。物理存在としてだけあることを超えて、「自然」を訴えかける象徴作用をもつものとして存在している。

象徴的次元を記号論的な解釈から整理し直してみると、山、川、海という名前（記号）はシニフィアンにあたり、山、川、海の表す意味内容がシニフィエにあたる。そしてこのシニフィエのうち、表層の意味がデノテーション（意味）、深層の意味がコノテーション（象徴）となる。



ここまで自然に括弧を付してきたのは、コノテーションとしての「自然」をみることを意識したからである。こうした象徴的次元の意味、特に深層の意味であるコノテーションとしての「自然」が人々の認識のうえで重要な働きを担っていることは明かである。卑近な例でいえば、水道の蛇口から流れる水に対して「自然」としての意味が喚起されることは希であるが、この水道水が採取される水源地の溪谷の水流に対しては大いに「自然」を感じ取りうるのである。「自然」についての認識を論じるうえで、「自然」を感じ取らせる象徴作用という論点は、物理的次元のそれよりも重要である。極端にいえば、物理的実存がなくても象徴作用さえあれば「自然」をそこに看取しうるのである。次のような例を考えてみると分かりやすい。バーチャルリアリティという仮想世界を実存世界であるかのように認知させる認知操作の技術がある。この技術によって「自然」を喚起する物理的実存の感覚刺激を擬似的に創りだして刺激を与えた場合、刺激を与えられた側はその擬似的刺激に対して「自然」としての意味が喚起されることは大いにありうることなのである。

山、川、海などといわれて「自然」が喚起されるという連想ゲームのような状況は、ある記号に対してある意味が対応するコードが成立しているため可能になる。こうしたコードに則ってある記号を用意してやれば、勝手に「自然」が喚起されることになる。こうした認識上での「自然」という視座をもつことによって、次のような事例を説明づけることも可能になる。オートキャンプ場のなかには都市公園や自然公園、農業公園などといったものがある。これらの施設が提供するの基本的には人工的に手を加えた疑似自然環境である。しかし、そこに集う人々はその「自然」を見ている場合がある。たとえ疑似自然であっても「自然」と感じとるのは、そこに「自然」を喚起させるコードに則った何らかの記号が存在するからである。こうした施設は人々の愉悅を成立させるための重要な要件である「自然」との接触のチャンスを提供しうるハードとなりうるのである。

認識論的な視座から自然環境をとらえていこうとする立場は、いくつかの領域で見受けられる。嘉田は無意識のうちに人々の行動に対して影響を及ぼす、環境に対する「意味づけ」を、「水のイメージ」を探ることから導きだしている。⁶⁾また、古川、大西らの「風景論研究会」の成果をまとめた『環

⁶⁾嘉田由紀子「水利用の変化と水のイメージ——湖岸域の水利用調査より——」『水と人の環境史——琵琶湖報告書——』鳥越皓之、嘉田由紀子編、御茶の水書房、一九八四年、二〇九頁

境イメージ論』によれば、パターン化され構造化された「風景」という環境に対する認識枠組みの生成過程と受容過程を、社会史的、認識論的な関心から解読している。⁷⁾これらの研究報告は人々のあいだに「自然」というイメージが流通しているという認識論的視座を基調としている。

こうしたイメージ（意味）をもとに人々のあいだで行為が営まれる。行為を考えるうえで、認識との連関を重視する所以である。次章では人々のイメージ形成や意味の認識に関わる人々の基本的な認知システムについて考える。

3. 「自然」という認識

3-1. ——認識の同心円構造 ——

前章では「自然」をあるコードによってイメージ化されたものであることをみてきた。ではこの「自然」は、周囲の世界を対象化して認知するより大きな規模での人間の認知の技法とはどのような関わりをみせるのだろうか。「自然」認識の背景ともいえる人間の基本的な認知システムとの関連をみていくことにしよう。

「人間は、個人でも集団でも、『自己』を中心として世界を知覚する傾向がある」とトゥアンはいう。⁸⁾自己を中心として世界を秩序づける認知の技法を日常的で習慣的な行為であるとし、人間の普遍的特徴として位置づけている。この自己を中心とする世界認識の仕方は、イデオロギーとして固定化しエイズム化すると、個人においては自己中心主義として、集団においては自民族中心主義として顕現化する。⁹⁾

こうした自己中心的な認知傾向という性質の議論なかで彼は重要なポイントを提示している。自己を中心に据えて世界を秩序づけていく認識方法は、自己のまわりに広がる世界の要素を中心から周縁部へと序列化していく営為である。世界は同心円状に序列化され認識される。中心には自己が据えられ、そこに中心性が発生する。序列化と中心性をともなう世界認識の仕方は価値認識とも連動する。価値判断の優位性は当然、中心におかれる。こうして世界の要素は中心から周縁へと価値的にも序列化される。このような認識の在り方を同心円構造としておこう。

トゥアンは地理学、人類学的な見識から自己中心主義的な世界認識観を紡ぎだした。古代民族や伝

⁷⁾古川彰、大西行雄編『環境イメージ論——人間環境の重層的風景——』弘文堂、一九九二年、五頁

⁸⁾イーファ・トゥアン『トポフィリア——人間と環境——』小野有五、阿部一共訳、せりか書房、一九九二年、六二頁

⁹⁾トゥアンは次のような様々な事例を列挙している。古代エジプト人たちの隣人（リビア、アジア、アフリカ人）らに対する優位意識、ギリシアの歴史家であるヘロドトスが述べているペルシアの自民族中心主義、ニューメキシコ北西区域に五つの文化がそれぞれに持つ強い自民族中心意識、世界帝国イギリス、中華思想など。（前掲書）

統的民族の世界においては、移手段の制限、知覚手段の制限などから認知世界は実際の地理的な同心円の広がりに近いたちで展開していた。世界は生活世界を中心として未知の外部世界へと理念的な同心円状に広がっていた。自民族が暮らす陸地の周囲がすべて海で囲まれ、その海の上に浮いている平坦な円盤という大地の観念は、世界の多くの地域で見られる。自民族を中心とする円形のコスモスのパターンのなかで知られている最も初期のものは、バビロニアの粘土板に記されているもので、バビロンを中心とする大地を取り囲むように海が描かれている。これはアッシリアの中心的なコスモスの観念の表現である。古代ギリシアにおいて地理学の権威とみなされていたホメロスの世界観は平坦な丸い大地が広大な流水に取り巻かれているというもので、これは西暦前五世紀頃まで受け継がれた。また、北カリフォルニアの先住民族ユーロク族も同じようなコスモスを描いていた。¹⁰こうした世界観は経験や実際の知覚をもとにして築きあげられてきたものであり、同時に彼らの知覚の及んだ地理的な範囲を指し示すものであると考えられる。近代世界では長距離移動や遠隔地の模様を容易に知ることができるようになってきていることから、認知している世界の地理的な広がりとは単純に円を描くものではなくなっている。

また、生活拠点の移動などによって中心が移動したり、重複することもある。このことを示す例としては「故郷」を挙げることができよう。地方出身地の都市生活者は生まれ育った故郷を、たとえ地理的には遠距離であっても認識世界の中心的な位置にしていることは当然ありうる事態である。だからといって、現代人の世界観は同心円を描かなくなったというわけではない。ただ地理的な意味で同心円を描くとは限らないということである。ここでいうところの同心円構造とは地理的な意味としてではなく、抽象的な認識の場での同心円構造をいっている。

世界認識の同心円構造では、世界の要素は序列化され秩序づけられていく。中心部には価値的に優位な領域が、例えば生活世界に代表されるような日常世界が配置され、外へと向かうにしたがって意識の度合いが低い領域、日常的な関わりやすい非日常の世界が配置される。

ここで注意しておかねばならないのは、中心＝日常、周縁＝非日常といった図式的な理解にすべてのものが当てはまるといっているわけではないところである。ここでは現代社会の人間、特に都市的な性格を内面化した人々を念頭においている。というのもアウトドアブームという現象は現代社会に特徴的な現象であり、さらにいえば非常に都市的な性格の色濃い現象であると考えからである。世界観における中心と周縁とは、それぞれの個人の個別の事情に基づく固有の基準、換言すれば、私的な尺度によって決まるものである。日常と非日常とは、その個人が属す社会集団の基準、言い換えれば、公的な尺度によって決まるものとしてここでは定義しておく。ある程度の共通性をもち、人々のあいだに流通しているコスモス像のある社会集団にとっての世界観とみてよい。都市性を内面化した人々の認識の場では中心＝日常、周縁＝非日常といった世界観が個別にも、集団的にも支配的と考える。

¹⁰前掲書、七一～七二頁、七五頁～七六頁

中心部は日常的であるという性格から、規範、規律、倫理、道德、しがらみなど社会的な意味（日常性）に拘束されやすい領域である。そこは濃密な意味の網の目の世界で秩序立った体系的で濃密な世界である。逆に周縁部では非日常的であるため、日常的な意味の網の目から解き放たれている。

3-2. ——遍在する“自然”と偏在する「自然」——

「自然」は人々の世界観のなかでどのような位置を占めているのだろうか。

先に述べたように「自然」とはそこに自然らしさを感じ取らせるような何かである。自然らしさを喚起する要素やその総体を「自然」としてイメージしている。人々は世界を分節化し、ある領域を「自然」という意味と結びつけて認識している。

「自然」が認識世界のなかでどのような領域を占めるかを考える前に、「自然」と自然（括弧なしの“自然”）との相異を確認しておこう。自然を考える場合、人工という概念との関係で考えると分かりやすい。一般に自然とは人工の反対概念として考えられる。つまり、人為との関わりの有無によって規定される概念であり、人為との関わりがないさまが自然とされる。とはいえ人工とは自然の人為的な操作を加えたさまにすぎないことを考えれば、人工と自然とのあいだに明確に線引きすることが難しい場合もある。さらに人間が自然の一部であるという考え方もできる。しかし一般的に現代社会では自然と人間あるいは自然と人工を同質のものとしてとらえてはいない。もともと哲学的な定義として自然と人間が同質にとらえられていた。古代ギリシアの自然概念はそれ自身が秩序をもって存在し、発展・成長するものとされ、人間はその小さなモデルとして考えられていた。¹¹⁾しかし、キリスト教の浸透とともに人間と自然との分離が推進され、人間は理性によって自然を統御するものであるとする立場が優勢になった。かつてその一部であるとされた人間は自然を対象化するようになり、自然と人間は分離した。こうして人為的に自然という概念が生成されてきたのである。その自然とは人為によることなくおのずからの生成、展開によってなる状態、となる。こうした自然観が現代文化の基礎にある。

このような“自然”の概念に対し、ツーリズムやアウトドアで求められているところの「自然」がカバーしている領域は非常にせまい。自然の要素のなかで人々が触れたいと望んでいる「自然」とは有意味で有益な一部分である。自然災害などの有益でない自然は「自然」のカテゴリーには入らない。自然のなかの有意な一部の限定された領域を「自然」としてとらえている。

あるがままのさまとしての自然、字義どおりの自然とは人間を含めていたところに存在しているということもできるが、人為・人工、つまり人間と切り離されるという歴史的な自然概念の転換点を経て、人間の対立項としての自然の概念が一般化した。その自然のなかのある領域が切り取られて「自

¹¹⁾参考文献、岩崎武雄、他編『現代の科学と哲学』有信堂、一九六八年、坂田昌一、近藤洋逸編『自然の哲学』（岩波講座『哲学』第六巻）岩波書店、一九六八年

然」¹²として流通するようになっているのである。

自然と「自然」の関係でいえば、自然は世界に遍在しているといえるのに対し、「自然」は偏在しているといえる。

こうした「自然」は人々の世界観のなかでどのような位置を占めるのであろう。ここまでみてきたように「自然」とは人間と切り離された“自然”のなかの有意義な一領域であるといえることができる。つまり、人間とのあいだにある程度の距離、縁遠さを感じさせ、そのうえ何らかの有意性をもつという性質を備えていなければならない。人間との距離、人為・人工との隔たりという点で、人々の認識の中心にくることは考えられない。したがって認識の同心円構造でいうところの周縁に「自然」が位置するはずである。先述したように都市的な認識の同心円構造では、中心＝日常、周縁＝非日常という対応がみられた。とすれば、周縁に位置する「自然」は非日常となるはずである。実は「自然」が非日常性を伴うことによって、人々はそこからある恩恵を享受することができる。この仕組みについては後の章で論じることになるが、ここでは「自然」が非日常であることによって有意義な存在となっていることを注目したい。こうしたことから「自然」は認識の同心円構造の周縁に位置するといえることができる。

3-3. ——日常と非日常のはざま ——

自然は人間と隔たった、把握しがたい縁遠い存在である。そうしたつかみどころのない自然の一部を切り取り、「自然」として理解し経験している。「自然」という認知のしかたは、こうしたとらえがたい存在を理解しやすくする認知の技法ともいえる。つまり把握しがたい他者を理解しやすいように考案された認識の枠組みである。このように自然をとらえるフレームの考案は近代に特徴的であるが、こうしたフレームは「自然」以外にもみられる。

自然をとらえるための認識の枠組みのひとつの例として「風景」を挙げることができる。佐藤は風景の概念について「近代という名の時代のもとで普遍化した関係性の誕生を象徴している」としてその近代的性格を示し、また「風景がテキストの累積である」としてその文化的恣意性を指摘している。

¹²「風景」という概念は自然を見る認識の枠組みを文化的に規定してきたものである。それはきわめて近代的な文化的恣意性を持った自然認識の枠組みであり、近代の創りだした自然を見る色眼鏡ともいべきようなものである。トゥアンはこうしたまなざしは来訪者（とくに旅行者）がもつものであり、自然を審美的観点から見る枠組みにはめるとして、こうした審美的観点と自然—ロマン主義との関係を述べている。¹³彼はまた、自然環境に対する認識が変化していく様をいくつかの例を挙げて描きだしている。例えば山のイメージについて古代ギリシア人たちが「自分たちが全体を把握すること

¹²佐藤健二『風景の生産・風景の解放——メディアのアルケオロジー——』講談社、一九九四年、五頁

¹³イーラー・トゥアン、前掲書、一一三～一一五頁

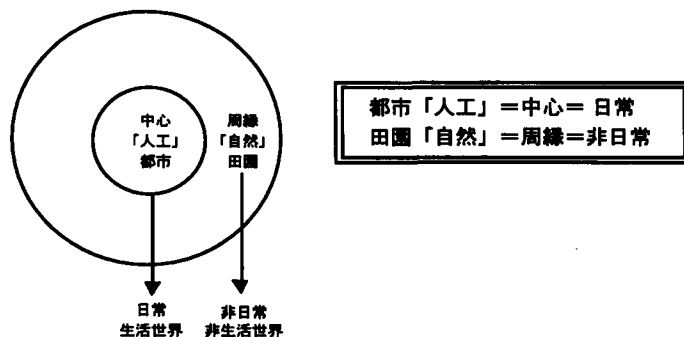
ができない自然の側面を前にして、嫌悪感と同時に畏怖の感情を経験」するようなものとして山を「野性的であり恐ろしいものであった」ととらえていたものが、一八世紀にはロマン主義の詩人たちによって、「山の壮麗さを称賛し、魂を揺すぶって恍惚状態にするような、荘厳な高さを称賛する詩」に歌われ、「山はもはや遠くにあるものではなく、不吉なものでもなく、地上で神に最も近いものとしての崇高な美を持つようになった」というような「山の評価の逆転」とこれに「貢献した知の変化」について述べている。¹⁴⁾

こうした例はとらえがたいものを把握する知の枠組みとしての「風景」の側面を指し示している。「田園」も同様な性質のものであるといえる。自然をとらえようとするとき「自然」「風景」「田園」などのフレームをもちいることで、自然の換骨奪胎が行われる。つまり、ありのまま、人為との隔たりなどという精神を引き継ぎながらも、新たな意味がつけ加えられ、新しいものの見方ができあがってくる。それは同時に受容しづらい部分を削ぎ落とすことにもなる。ここでは自然のもつ、鋭さ、どぎつさ、野蠻などの野性が削ぎ落とされている。自然を「自然」「風景」などの形式に整えるプロセスは、近づきがたい野性を受け入れやすいかたちに変える自然の家畜化の過程といえる。これらの方法は近代社会が生みだした認識の技法なのである。

こうした「自然」が近代の創りだした産物であるとはいえ、実際には人々はこれを自明の実体であると受けとめており、「自然」をもとめる行為を実践している。「自然」を希求するメンタリティは次のような記述にも現れる。

「余暇活動における自然とのふれあいは、人間性の回復、自然に対する豊かな感性の醸成など、今日の都会化された日常生活を送る多くの国民に必要なもので（中略）精神的に豊かな生活を送るための要素として重要である」¹⁵⁾

都市化された社会の人間（近代的人間）は、「自然」を精神生活のうえで非常に重要視していることが分かる。こうした人々の認識世界は図式的にいうと次のような関係になろう。



¹⁴⁾前掲書、一二六～一二九頁

¹⁵⁾『環境白書（総説）平成10年度版』環境庁、大蔵省印刷局、一九九八年、三七五頁

都市（＝中心）の人々が田園（＝周縁）へと移動してゆき、そこで日常（＝「人工」）ではなかなか触れることのできない非日常（＝「自然」）にアクセスする。こうすることによって、精神的な充実を図る。「自然」＝「田園」とのコンタクトによる精神世界の充実を獲得することを目的としているが、それは日常性からの離脱を前提としている。この日常性からの離脱こそが、いいかえれば非日常への没入こそが「自然」を志向する行為の本質的な意味なのである。

「自然」や「田園」といった概念が近代的な産物であり、これを志向する主体が主に都市生活者であることを考えれば、「自然」を志向する行為はきわめて近代的性格の色濃い行為であるといえる。しかし、こうした行為の近代的な性格を指摘するよりも、近代的な枠組みを利用しながら人々が実践している行為の本質的な意味（日常性からの離脱・非日常への没入）を問うことこそ重要であろう。次章では「自然」をもとめる行為と日常・非日常との関係を、事例をまじえながらみていくことにする。

4. 先鋭化するアウトドアムーブメント

4-1. 「自然」志向のパラドクスとアンビヴァレンス

「自然」と関係する日常性と非日常性についてみていこう。「自然」はこれまでも述べてきたように認識の同心円構造のなかで中心から隔たった周縁に位置する。そこは近づきたい領域ではあるが、かといって完全にシャットアウトされた領域でもない。「自然」とはある程度の隔絶された感覚を必要としている。それは「自然」の概念が、人間との隔絶という自然の精神を受け継いでいるからであった。しかし「自然」は自然を受容しやすいようにと創りだされているため、完全に遮断されているわけではない。そうした事情から、「自然」は認識の同心円構造で周縁に位置することになる。中心＝日常、周縁＝非日常という対応から、中心である日常的な領域からある程度隔たった周縁に非日常的な領域として「自然」が成立していることになる。「自然」は簡単には近づきたいが完全に締めだされているわけではない微妙に隔たったところに成立している。この距離はさまざまな要素によって決まってくるものと考えられるが、これが微妙にシフトしつつあるのが、現代の特徴である。「自然」を身近に引き寄せたいという欲求が非常に高まっているのである。

「自然の保護と利用に関する世論調査」（環境白書・前掲）によれば、「住まいの周辺にもっと自然があったほうがよいと思うことがあるか」との設問に対し、八割の人が「もっと自然があったほうがよいと思うことがある」と答えている。このことは「自然」をより身近におこうとする要求がひろく行き渡っている事実を示している。

こうした「自然」を身近に引き寄せようとする力が、パラドキシカルでアンビヴァレントな私たち

で具体的な行為として表出しているのがオートキャンプであるといえる。キャンプといえば三角柱型のテントと飯ごう炊さんとカレー、少し豪華になるとバーベキューとキャンプファイアというのが、かつてのお決まりのキャンプスタイルであった。キャンプでは生活に必要な最低限のものしか用意しないという暗黙のルールがあった。しかし現代のオートキャンプでは事情は大きく異なっている。オートキャンプ場では次のような光景を目にすることができる。

キャンプ場へは大抵の場合、RVなどの自動車で家族などを連れだってグループでやってくる。RVには様々なキャンプ用品が満載されており、到着するとまず住空間が様々な道具によって造りだされていく。家族用テント、タープなどの設営に始まり、テーブル、ロッキングチェア、ガスコンロなどが用意される。食材なども車に積まれてきたり、車で買いだしにでかける場合が多く、現場で調達されることは少ない。軒並み、キャンプに必要とされる生活必需品は十分すぎるほど揃っている。

しかしこれだけではない。CDコンポ、テレビ、ビデオカメラ、冷蔵庫、コンピュータゲームなど、およそキャンプに最低限必要であるとは思われない機器がキャンプサイトの至るところで見られるのである。冷蔵庫からビールを取り出してチェアに腰掛けてテレビを眺め、子供たちは菓子を頬張りながらポケットゲームに興じる。必要なものがあれば、車でコンビニへ買い物にでかける。というような光景がオートキャンプ場で展開している。ここでは日常的な生活世界が再現されているのである。

こうした事態はかつてのキャンプの文法にあてはめにくい。生活に必要な最低限のものしか用意しないというかつての暗黙のルールは、生活という日常性を最大限剥ぎとり、キャンプにできる限りの非日常性をもたらす原理として働いていた。しかし現在行われているオートキャンプの文法は、できる限りの生活世界をキャンプ場に持ち込むことによって、生活という日常性を最大限、非日常世界に近づける原理として働いている。

オートキャンプという行為の形式は、「自然」を身近に引き寄せようとするエートスがパラドキシカルでアンビヴァレントなかたちで表出した行為であると先ほど述べた。日常のなかに非日常性を取り込もうとしている点、つまり互いに異質なものを同居させようとしている意味でアンビヴァレントである。また「自然」を身近に引き寄せようとするエートスが逆に「自然」に生活世界を近づけていこうとする形式で体现されている点でパラドキシカルである。

オートキャンプは最近台頭してきたブームであるという意味で「自然」を志向する行為の最先端に位置するといえるが、それよりも「自然」に対する人々の要求、「自然」を享受したい、しかもできる限り身近に「自然」を引き寄せようとする要求が、具体的に行為の形式に現れているという意味で先鋭的な「自然」志向の行為形態といえる。つまり、本来ならある程度の間隔が保たれていなければならないはずの「自己」と「自然」との距離が、急激に縮められている点で先鋭的なのである。

4-2. ——「自然」を希求する原理——

先に「自然」が求められており、その「自然」は非日常性をともなうものであることをみてきた。では人々はなぜ「自然」を求めようとするのか、「自然」を求める行為にはどのような構造があり、どのように機能しているのかを考えてみる必要があるだろう。ここでは「自然」を希求する原理を考えてみる。

人々が「自然」を志向するとき、そこでなにが求められているかを知ることが、人々がこうした行為の意味を知る重要な手がかりになる。先ほどの記述によれば「自然とのふれあいは、人間性の回復、自然に対する豊かな感性の醸成など、今日の都会化された日常生活を送る多くの国民に必要なもので（中略）精神的に豊かな生活を送るための要素として重要である」。¹⁶都市生活者が「自然」との接触によって、人間性の回復、豊かな感性、精神的に豊かさなどが獲得されることを希求しているといえる。つまり精神的な充実を享受したいと望んでいる。

人間性、豊かな感性、精神性といったものの回復といった理念は「遊び」の議論における理念型と一致する。遊びの概念についてのホイジンガ、カイヨワらに始まる議論においては、「遊び」を卑俗で日常的な生活から切り離された自由で、主体的な人間解放を促す活動であるとする理念型として論じられてきた。¹⁷このことから都市生活者の「自然」を志向する行為は「遊び」概念のひとつの具象化された形式といえる。また「遊び」という言葉は「余裕」や「ゆとり」の意味を内包し、「遊び」の態度は自由と創造性を発揮し、思いきった冒険や実験が可能である。しかし、これは反面で気楽で無責任な態度ともとられることもある。¹⁸「自然」志向の求める先は、「遊び」から獲得される「解放」「自由」「余裕」「ゆとり」などの精神状態である。「遊び」の理念的概念から分かるようにこれらの精神状態は、日常的な生活から切り離された環境で獲得されやすい。つまり「自然」は精神的な充足にとって好適な環境としてが受けとめられている。このことは「自然」が日常から遊離した環境、つまり非日常の性質をもった環境として認識されていることを示している。なぜ非日常の「自然」を求めることで精神的充足が得られるのか。

ここで先ほどの認識の同心円構造に立ち返ってみる。生活世界、日常としての都市は、認識の中心にあり、「自然」、非日常、田園は周縁に配置される。中心としての都市は日常の場、生活の場であることから、社会的な論理（規範・モラルなど）が張りめぐらされていて、そうした論理に従うことが要求される拘束的な世界である。また周縁としての田園はそうした日常的な拘束性は希薄である。

¹⁶前掲

¹⁷「遊び」概念を日常生活から遊離した理念型として「文化」主義の立場から論じたホイジンガらの流れに対し、日常生活に密着した「生活」主義の立場から論じた、権田保之助らの「遊び」の概念も提起されている。こうした議論については井上俊「生活のなかの遊び」（『岩波講座 現代社会学20 仕事と遊びの社会学』井上俊、上野千鶴子、大澤真幸、見田宗介、吉見俊哉編、岩波書店、一九九五年）に詳しい。

¹⁸井上俊、前掲書、一三、一四頁

日常の場、生活の場ではなく、社会的な論理に取り込まれる必要性が発生しないからである。よって、解き放たれた自由で開放的な非日常世界となる。こうした認識世界が構築されることになる。こうした構造があるため、「自然」に向かうことによって拘束的な日常性から解放されて、精神的なリフレッシュが達成される結果になるのである。

「自然」「田園」「風景」などは都市の周縁に配置され、都市社会にとって非日常としての意味をもち、規範・モラルなどの日常性が弛緩するトポスとして意味づけられることになる。しかし、都市にとって社会的な拘束から解放される場であっても、その地元社会にとって、そこは日常の場、生活の場として中心性を帯びており、両者の認識にズレが生じる事態は当然起こりうる。この認識のズレが具体的に表面化したのが地域社会問題といえる。解放的で自由な「自然」「田園」というステージは、規範、モラル、常識、役割、しがらみなどの日常的なコードを緩める。普段ならば規範に反すると映る逸脱的な行為であっても、こうした場では許されてしまうことになる。こうした行為は逸脱行為とは受け止められない。「自然」や「田園」というトポスが行為の逸脱性をはぎ取ってしまうからである。

しかしそこを生活の場とする地元住民にとってみれば、これらの行為は明らかに日常的な社会の決まり事に抵触する違反行為と映る。キャンプ客が残すゴミや深夜の花火などがよく問題となるのは、これらの行為に対して都市社会と地元社会が付与する意味に大きなズレがあるからである。モラルに照らせばゴミや花火は重大な反則行為であり当然自粛されるはずであると地元側は考える。よって日常的な自明の論理に基づいて問題の解決を訴える。しかし都市側はこれと同じ論理が通用しない状態となっている。こうした事情から両者の係争はいつまでたっても解決されない。両者が同じ土俵に立っていないことと、都市側に「加害」意識が発生しにくい構造を生じていることがこうした問題の解決を困難にしているのである。

4-3. ——日常性の持ちだし現象 ——

冒頭の問題に立ち返ってみよう。オートキャンプ客が釣り客とは対照的に良いイメージを持たれているのはなぜだろうかという問題である。オートキャンプ客と釣り客の大きな相違点として地元の人々に認識されている要件のひとつは「マナー」が体现されていると感じるかどうかである。オートキャンプ客はマナーを内面化しているとして受け止められ、釣り客は内面化できていないと大きく大別して認識している点である。こうした違いはどのようなところから来るのだろうか。

地元の人々にとってマナーが内面化できているとは、彼らの生活世界の規範にのっとった行為を実践できる態度を備えているということに他ならない。彼らの生活世界の規範に抵触しない行為様式をもちあわせていることが、彼らにとって「マナー」が守られている状態なのである。こうしたマナーは彼らがいうように「教育されてきた」成果であるといえるかもしれない。しかし、ここではもう少し

し広い射程で、マナーの内面化についての要因を考えてみたい。

先に述べてきたように、キャンプ場などは都市社会の人々にとって大いに地元社会の規範が破られる可能性の高い場であると述べた。このことからオートキャンプ客が地元社会の規範を内面化しているという事態は考えにくい。オートキャンプ客が都市社会の規範を逃れ、日常性から解放され自由になるために「田園」にやってきているからである。しかしここで、非常に先鋭的な「自然」を志向する行為として顕在化している、オートキャンプの現場を紹介した先の場面を思いだしていただきたい。オートキャンプ場には、本来「自然」を志向する行為の本質である日常性からの脱出という性格からは、およそ想像することができない数々の日常的な生活世界の再現場面を目にすることができた。それはテレビであり、冷蔵庫であり、ポケットゲームであった。これら生活日用品は本来なら非日常であるべきオートキャンプ場に日常的な生活世界を創り出す道具であり、オートキャンプ場はまさに日常生活の再現の場となっていた。

これは「自然」をより中心に近づけようとするエートスが強く働いたためのパラドキシカルな結果であることを先に確認した。「自然」をできるだけ身近なところに引き寄せたいという要求が、非常に先鋭化したかたちで「自然」との接触の新しい文法を生みだし、その結果、顕在化したのがオートキャンプという形式である。

できる限り生活世界を「自然」のなかに持ち込もうとするオートキャンプの文法は、同時に生活世界の日常性（規範・モラルなど）をも持ちだす結果となったと考えられる。都市住民の生活世界が地域社会の生活世界に非常に接近し、重なり合うことによって規範が共有される部分がでてくる結果を招いたと考えられる。これとは対照的に、釣り客は基本的に釣り場としての「自然」のフィールドに生活や日常を持ち込む文法を持ちあわせていない。釣り場はあくまで「遊び」の場として存在している非日常世界なのである。そこには釣り客の日常性と地元社会の日常性が重なる状況は期待しがたい。こうした結果、釣り客に「マナー」が体现されることは非常に希になるのである。

終わりに：近距離化の臨界点 ——生活世界の水平化現象 ——

きわめて現代的な社会問題として、自然環境問題が顕在化してきたのは一九六〇年代以降のことであり、つい最近になって問題化してきたイシューであるといつてよい。こうした自然環境問題に対しての主要なアプローチとして、従来、支配的であったのは自然科学的な視座からなされるものであった。しかし社会科学的な立場から、環境問題の認識論的な側面の重要性が指摘されることによって、環境問題をとらえるまなざしは大きく変容した。なかでも、自然環境に対して投げかけられるまなざしの近代的痕跡が指摘され、こうした近代的なまなざしが環境問題と複雑に絡みあっていることがいくつかの社会学的な研究領域から読み解かれてきたことは、環境問題をとらえるうえでの前提として

受容されている。こうした流れから自然環境問題はきわめて近代的な問題であると再認識され、近代社会の性格を見ることのできる領域として環境問題はとらえられるようになった。

環境問題を近代社会に特有のものとしてとらえるパースペクティブは、環境問題を解説するうえでのひとつの認識枠組みを提供したが、また一方で新たな認識的視角を提供することとなった。地域研究者たちはこうしたパースペクティブは環境問題が起きている当事者としての地域社会の観点に欠けているのものであるとして、反省的に受容し、当該社会の認識を重要視する立場を打ちだした。こうした視角からは近代性が相対化され、この近代性に対して地域社会が影響を受けるさまを、近代性との関係性を描くことによって明らかにしてきた。それはときに近代との対立として、ときに受容として提示されてきた。そこでは地域社会が近代社会によって影響を受け、浸食され、受容する地域社会としての姿が浮き彫りにされてきた。

実際、中山間地や過疎地などを訪ねてみると、地元の老人たちが近代的な要請を受容している姿が見受けられる。二、三の例を挙げれば、都市に住む孫が田舎の汲み取り式便所を怖がるという理由から簡易下水道事業を受け入れる例や、将来、都市に住む息子夫婦が帰ってきた際に機械化された農作業がしやすいようにと圃場整備事業を受け入れる例などがある。「地区の人達の古い考え方を変えていかんといかん」という直接的な表明を耳にすることも度々である。地区の老人たちが内面化している伝統的な論理をねじ曲げていかねばならないと意識させてしまうほどに、近代的な論理が影響力をもって浸透してきているのである。こうした例は固有の個人的状況に影響されることが多いとはいえ、そこには強い影響力を持つ近代の姿がうかがえる。こうした圧倒性に対して、微視的に地域社会が近代性を意図的に受容し、資源化して活用してゆく逞しい姿勢もみられることがいわれているが、大局的な勢力構造はそのままであり、威圧的な近代との力関係は依然として変わるものではない。

そうしたなか、本稿で取りあげた社会現象はひとつの示唆的な予兆であるといえるかもしれない。オートキャンプをめぐる動向を主に取りあげたが、この近代的現象はきわめて先鋭的である。きわめて先鋭的であるが故に地域社会の生活世界へと近づきつつある。それは具体的には都市社会の生活世界を地域社会のなかに持ち込むことによっておきる日常世界の近接化、日常性の共有などの形として現れている。都市社会から地域社会へと向かう近距離化は、アウトドアという「遊び」の契機から発している。しかし、こうした傾向が先鋭化するなかで、「遊び」を成立させていた「距離」が消滅しつつある。その結果、「遊び」の要素は「日常性」へと転化しているのである。こうして「遊び」を追究するほど「遊び」が消滅してゆくという逆転現象がおきているのと同時に、生活世界の近距離化による「日常性」の獲得という結果に至っているのである。

このことは、これまで地域社会が近代性を甘受するしかなかった状況、つまり都市から地域社会への一方的な論理性の流れとは対照的に、都市社会が地域社会の日常的論理を受容していくこれまでとは逆の方向性が見えてくるのである。これまでは「近代に取り込まれる周辺社会」としてとらえられ

てきたが、こうした認識ではとらえがたい動向がみられるようになってきているのである。これは近代の威圧性に対して周辺の自立性を唱えるというような素朴な多文化主義の図式に立つものではない。しかし、地域社会の自立性を保証することの可能性を示唆するものではある。だがこうした認識枠組みに留まっていたら、こうした現象に対しての理解は浅薄なものに終始してしまう。そうではなくて次のようにとらえるべきである。近代社会の人々の「自然」を求める要求が肥大化してきた結果、生活世界をできる限り周辺世界へと持ち込む現象が起きている。それは近代的な日常世界が周辺世界との隔たりを縮めてきていることを示している。その極点では近代的な生活世界と周辺社会の生活世界とが重なり合う事態が起きている。ここにおいて近代社会の論理と周辺社会の論理のズレが是正される可能性が生じてきているのである。こうした事態は近代性が周辺に対して近距離化を図っている、その臨界点において生活世界の水平化現象が起きているととらえるべきなのである。

こうした事態は近代が周辺を取り込んでいく過程ととらえられるかもしれないが、そうではないと考える。たしかに近代の側からの働きかけ（「自然」への志向、生活（日常性）の持ちだし、近距離化による生活の水平化）があると考えられる。しかし、こうした生活の持ちだしという事態が起りやすいオートキャンプという形式での都市からの来訪者を受け入れる方法を選択したのは地元住民なのである。そのベースにはキャンプ場を自分たちで立ちあげ経営してきた、地元住民の数十年の経験がある。ここに取りあげたのは地元管理型の事例であり、オートキャンプ場としては他にも行政主導型や巨大資本主導型などがある。オートキャンプという形式ではここで説明したような事態（規範の共有など）が同じように起きているであろうが、こうした形式での受け入れを地元が能動的に選択しうることに意義を感じるのである。

参考文献

- 新井直之『メディアの昭和史』岩波ブックレット、一九八九年
- イーファー・トゥアン『トポフィリア——人間と環境——』小野有五、阿部一共訳、せりか書房
- 井上俊、上野千鶴子、大澤真幸、見田宗介、吉見俊哉編『岩波講座 現代社会学20 仕事と遊びの社会学』岩波書店、一九九五年
- 佐藤健二『風景の生産・風景の解放——メディアのアルケオロジー——』講談社、一九九四年
- 総理府編『観光レクリエーションの実態——第八回全国旅行動態調査報告書——』大蔵省印刷局、一九九七年
- 総理府編『平成10年版観光白書』大蔵省印刷局、一九九八年
- 鳥越皓之、嘉田由紀子編『水と人の環境史——琵琶湖報告書——』御茶の水書房、一九八四年
- 地域社会学会『地域社会学会年報 第七集 ——地域社会学の新争点——』時潮社、一九九五年

古川彰、大西行雄編『環境イメージ論——人間環境の重層的風景——』弘文堂、一九九二年

星野克美『消費の記号論——文化の逆転現象を解く——』講談社現代新書、一九八五年

安田喜憲、菅原聰編『講座 文明と環境——第9巻 森と文明——』朝倉書店、一九九六年

(いど さとし・博士後期課程)

Environmental Sociological Study of Outdoor Boom: Considering Structure of Natural Cognition

Satoshi IDO

Recently, the number of people doing outdoor activities is increasing. Camping, fishing, skiing, snowboarding, scuba diving, mountain climbing, etc. are very popular in modern Japanese society. Especially, auto-camping is one of the most popular outdoor leisure. But it is a relatively new camp style. So it is hastened to found auto-camping grounds in many local districts. These outdoor activities need nature to get sufficient pleasure. Why does nature give pleasure to them?

In this paper, what is nature to them, how they recognize nature, what principle work in doing outdoor activity, are studied considering structure of natural cognition. Outdoor activity has a function to set a person free from usualness that restrict one's performance in daily urban life. So he can deviate from his custom and refresh himself with outdoor activity. He, though, might deviate from local customs. This fundamental principle leads to local social problems and makes these problems difficult to solve.

Auto-camping is a remarkable outdoor active style. It shows a distinctive way to approach nature from other outdoor activities. In auto-camping style, they bring their own daily life to camping ground, and at the same time, they bring their daily norms with them.

These perspectives, considering the relation between outdoor activity and structure of natural cognition, and this theme, outdoor activity and auto-camping, have been dismissed in many of former environmental sociological studies.